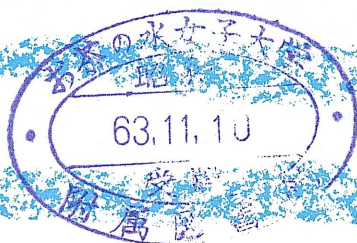


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1988
12



見る目を育てる 実践シリーズ

全5巻



監修・編著

森上史朗(日本女子大学教授)

大場幸夫(大妻女子大学教授)

吉村真理子(松山東雲短期大学教授)

第一巻「子どもを見る目」

第二巻「保育実践を見る目」

第三巻「保育計画・形態を見る目」

第四巻「保育の現在を見る目」

第五巻「問題行動と障害を見る目」

保育の本質をしっかりと把握するためには、「子どもを見る目」「保育を見る目」を養わなければなりません。本シリーズでは、実践例を通して、わかりやすく「見る目」を解説していきます。

全5巻・A5判・平均228ページ・定価各1,700円・セット定価8,500円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十七卷

第十二号

幼児の教育 目次

— 第八十七卷 第十二号 —

© 1988

日本幼稚園協会

優しさこそ……………森田 宗一…(4)

雨の日の独り言……………上坂元 絵里…(12)

したしみを向けるゆとり……………津守 真…(13)

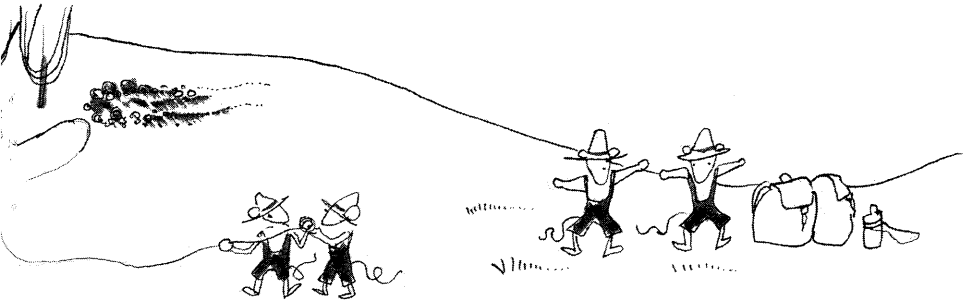
SF的読み解き 子どもという風景

最終回 コトワザの仕掛け……………堀内 守…(19)

幼児と共に迎えるクリスマス

— 総合的表現としての

クリスマス聖劇に取り組む過程……………赤羽 美代子…(29)



子どもと(9)

年のおわりをしつとりと……………清水 光子…(36)

中国のむかしばなし

「人参の精と紅カンのものがたり」 小山子シヤコ與紅コウ扭……………近藤 伊津子・編…(42)

南の島の子どもたち(5)

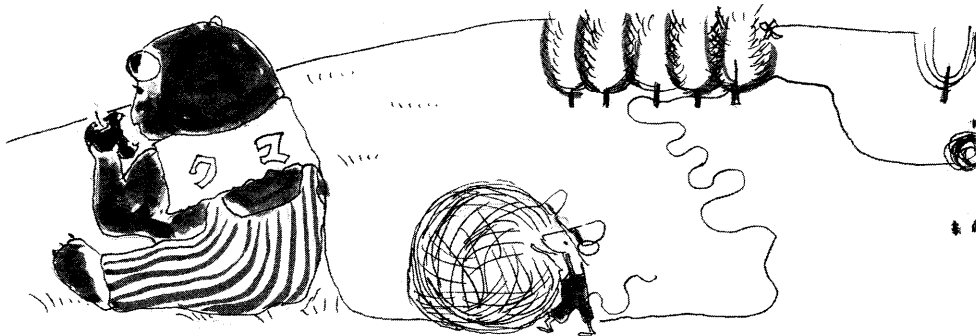
子ども心のこだわり、とらわれ……………浅野 恵美子…(46)

幼児の社会性に関する一考察(1)

『出会い』について……………上垣内 伸子…(54)

第八十七巻総目録……………(62)

カット・福田 理恵
編集部・向山 陽子



優しさこそ

森田 宗一

(一) 井村医師の子らへの遺書

心の優しい、思いやりのある子に育ちますように。

悲しいことに、私はおまえたちが大きくなるまで待つていられない。もうあとどれだけでも、私はおまえたちの傍にいてやれない。こんな小さなおまえたちを残していかねばならぬのかと思うと、胸が碎けそうだ。

いいかい。心の優しい、思いやりのある子に育ちなさい。そして、お母さんを大切にしてください。父親がいなくても、胸を張って生きなさい。私は最後まで負けない。おまえたちの誇りとなれるよう、決して負けない。だからおまえたちも、これからどんな困難に逢うかもしれないが、負けないで、耐えぬきなさい。

サン・テグジュベリが書いています。大切なものは、いつだって、目には見えない。人はとかく、目に見えるものだけで判断しようとするけれど、目に見えているものは、い

ずれば消えてなくなる。いつまでも残るものは、目には見えないものなのだよ。人間は、死ねばそれで全てが無に帰する訳ではない。目には見えないが、私はいつまでも生きています。おまえたちと一緒に生きています。だから、私に逢いたくなる日が来たら、手を合わせなさい。そして心で私を見つけてごらん。

私はもう、いくらもおまえたちの傍にいてやれない。おまえたちが倒れても手を貸してやることもできない。だから、倒れても倒れても自分の力で起きあがりなさい。

さようなら。

おまえたちがいつまでも、いつまでも幸せでありますように。

雪の降る夜 父より

これは、自分のガンによる死期を知った三十二歳に満たない医師井村和清さんが、二人の子供（一人は胎児）に残した遺書の一節である。昨日は過ぎ、明日はまだ来ない。それ故にいのちある限りの今日を誠実に優しく雄々しく生きぬいた井村さんのことは、その家族だけでなく、世話になった患者や病院の人々、接したすべての人々の心にいつまでも生きています。また、『飛鳥^{あすか}へ、そしてまだ見ぬ子へ』という本となって、多くの読者の心に灯をともしている。

私もこの本によって心の灯を与えられ、その遺された母子が、沖繩に帰って薬局を開店し、新しい生活を力強く始め、遺志をついで優しく強く生きておられることを知って、心

温まる思いをもった。短かかったが、何というすばらしい生涯を地上に残した人だろう。何という価値ある遺産を妻子に残した方だろう。胸のあつくなる感動を忘れることができない。

夫人の倫子^{みち}さんは、この本の末尾に「祈りをこめて」という一文にこう書いておられる。勝ち目のないいきさ。それでも愚知一つこぼさず、まわりの人たちに最後まで氣をくばり、いつも目には微笑^{ほほえ}みをたたえ、生命^{いのち}盡きる日まで頑張つて生き抜いた主人。：、彼が待ち望んだ「祈りの子」清子も生まれ、小さな両手両足を力いっぱいふるわせて、生命^{あか}の証^{あかし}をみせておりました。

それにつけても思い出すのは、私が二人めの子どもを身籠^{みごも}ったことを知ったときの主人は、まるで勇者のようでした。目は輝き、何事も恐れない武者そのものでした。私はお腹の子に向かい「あなたが生まれてくるころには、もうパパはいないわね」と、涙をこらえることはできませんでした。主人が残された数か月の命を立派に生きぬいたことは、私たちの二人の子どもに、いえ、生ある者への一つの贈り物だと思えます。二人の子どもに言いましう。「あなたたちのお父様は、病気に負けたものではありませんよ。医学の力が及ばなかったのです。最後まで負けなかったのですよ」と。

その倫子さんは、次の様にも語っている。「この子たちが夫の望んだ心優しい子になってくれるかどうか、それだけで頭の中は、いっぱいなんです」。飛鳥ちゃんと清子ちゃんを強く抱き寄せながら……。

(二) 優しさのない世相

今日この頃の世相を見ると、何とも無情殺伐。優しさ思いやりの何と乏しいことである。生命をいとおしむ心がない。中学生が両親を殺し祖母を殺すとか、親が子を殺す、親しい友達を殺害する、などという事件が相次いで心を痛ましめる。またおよそ生きとし生ける生命を愛惜する心が失せている。小鳥や草花をむやみに殺し、自然を容赦なく破壊する。そういうことにも優しさが失われてしまっている。

「ママ、わたしを殺さないでね。きつといい子で生まれるから」、これは胎児の切なる声だろう。年々数百万人の胎児殺害（理由なき中絶）がある。人間の生命軽視はここに始まるといってよい。そのバチが当たっているともいべきだろうか。この頃こんな若い母親の叫びがあるそうである。漫談や落語の話でない。深刻な声なのだという。

「坊や、ママを殺さないでね。勉強しろって言わないから。坊やのためを思ってるんだから。」寒々としたわびしい話ではある。

この頃の家庭問題や教育問題、そして青少年問題、その他様々の人間関係の不幸な問題の根は、一言にしていえば、愛の欠如、優しさの消失ということではあるまいか。愛などということからして薄手に心なき粘膜接触だけに解される傾向がある。ほんとうの愛とは優しさのこと、その生命を惜しみいとおしむことである。個を愛惜し、その身になりきることである。

沖縄古来の語に「肝苦りさ」というのがある。肝とは肝臓とかはらわたということ、そ

れが痛み苦しむ、単なる同情とか可哀そうという薄っぺらのものでない。人が苦しんで痛んでいると、こちらのほらわたが痛む。言葉を越えた慟哭の共有である。それこそ優しさの原点ではなからうか。私はいつも思う。人生におけるたしかかな愛とは優しさのことではないかと。そして優しさとは、その字の如く、人が他人の憂のそばにびったり寄り添った姿である。

その優しささえあれば、今日の家庭や教育の場にある多くの問題は、おおむね解決するのではあるまいか。社会における様々の不幸も解消するのではあるまいかと思う。しかし今日の世の中には、人が優しくあろうという心根をおしつぶす構造がある。優しさをさまたげる体制がある。大江健三郎氏も言うように、それと闘うことが社会的優しさというべきことなのではあるまいか。

思えば、医師井村さんは、何という優しさのよいお手本を示してくれたことであろう。そして優しさは、何という素晴らしい生きる力の源となったことだろう。奥さんや子供さんたちだけにだけでない。井村さん親子のことを知るすべての人に対してである。

(三) 幼な子の優しさと激しさ

ふかぶか　優しく聖なる　牛の眼よ　すなほにわれも　生くべかりけり　……宗一

日盛りの道で、秋の花野で、冬の枯野で、あの牛に逢うごとに、私はその眼の優しさと全身の力強さと迫力に感動する。数年前、寝袋を持ってインドの旅をした時、いたるとこ

ろで牛に出会い、感激を深くし、高村光太郎の長篇詩「牛」を思い出した。そして牛と共生している人々、とりわけ子供目の優しくキラキラ光っているのに深く感じた。

優しさが人間関係の中に失われている今日の世相ながら、牛ならぬ人間の子供、幼な子を見ていると、心なごみ、純粹にさせられる。子供の目、子供の笑い、子供の心の肌、すべてが優しさに溢れている。その優しさはまた子供の激しさに通う。生まれて間もない赤ん坊は無能力に見える。自分のことも何一つできないみたい。しかし自分の欲求をみたしたい時は、ひたすらに泣く、いや、ひたむきに母親を呼ぶ。おっぱいを飲み満ち足りると、すやすや眠り、さめればつづらな優しい瞳をかがやかせて微笑む。みつめるこちらも思わず笑いにひきこまれる。

その優しさの中に、火のような烈しさがある。笑っていたと思うと、また激しくしつこく身もよもあらぬばかりに泣く。そのひたむきさ、つよさ、激しさには、お手あげということが多い。しかし母親が抱きかかえると、すぐピタリと泣きやみ、ニコニコ顔になる。赤ちゃんの激しいつよさは、その無垢の優しさからこそ生まれるもの、それがお母さんの内にある優しさと強さを湧き出させるもの。そんなふうに思われる。優しさが凡てのもつだという気がする。

このようなことを思うと、私は南多摩の生んだ天性の詩人八木重吉の詩を連想する。生命のしたたりにも似た、生命そのものの燃焼のような、珠玉の詩である。優しさに溢れた

詩である。その詩人の優しさが、いつも心に迫り、純粋なある力を与えてくれる。やはり「優しさこそ」と思うのである。

さて あかんほうはなぜに

あん あん あん あん なくんだろうか。

ほんとうに うるせいよ

あん あん あん あん

あん あん あん あん

うるさか ないよ

うるさか ないよ

よんでるんだよ

かみさまを よんでるんだよ

みんなも よびな

あんなに しつこくよびな

八木重吉の詩には、すばらしい短かい詩が多い。そのいくつかを、更に静かに口吟んでみることにしよう。

○赤んぼが わらふ

あかんぼが わらふ

わたしだって わらふ

あかんぼが わらふ

○うつくしいところがある

恐れなきところがある

とかす力である

そだつるふしぎである

○おしろい花をみてゐると

こころがやさしくなってくる

(元東京家裁判事)

◆◆◆◆◆
雨の日の独り言
◆◆◆◆◆

上坂元 絵里

雨の多い一年だった。九月のある日、雨上がりの午後、庭そうじをしている私の耳に近くの学校のプール指導の拡声器の音が飛び込んでくる。保育後の余韻の中でその日をふりかえるひととき、否応なく響く大きな音に、何か鈍化されたものを感じる。

都会の生活、限られた空間で暮らす子ども達にとって幼稚園の生活は、ある種の発散の場となっている事は否めない。雨の日、保育が終わると多重的な音の中で過ごした、ぼっかりした残響を感じる。外へ出られず保育室へ閉じ込められた子ども達は、いつもよりも声高に遊ぶ。三歳・四歳の子ども達が始めて幼稚園・保育園という集団と出会った時、あの騒々しさをどう受けとめるのだろうか。『力には力を』でつ

いつい声を張り上げてしまふ私だけけど、本棚の隅で一人、絵本を眺める子、黙々と絵を描く子に、各々の生活を保証してあげたいと願うこの頃だ。

大声を張り上げる子どもたちのパワー、伸びやかさは大切にしてあげたい。けれども、それ故、集団の場は喧嘩なのは当たり前前でマイクを使えば解決できると考えるのは少し違うように思う。

雨の日、保育室のガラス越しに子ども達と園庭を眺めるほんの一瞬が私は好きだ。雨の降り方はいろいろで様々な音がする。お庭へ出たくて仕方がない子ども目の目に雨のお庭はどんな風に映るのだろうか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

したしみを向けるゆとり

津守 真

夏休みのあと、久しぶりであの子と出会うのが待ち遠しい。毎日子どもとの生活の中に巻きこまれているときと違って、一步退いたゆとりをもって子どもと出会うことができる。休むことによって、私も本来の自分を取りもどし、常よりも透き通った眼で見られるような気がする。子どもも、久しぶりで学校にくる新鮮な気持があるのだろう。

二学期の最初の日、S夫はいつものように校長室に私をさがしにきた。私の手をひいて学校中をひとまわり歩き、以前と同じかどうか調べてまわった後、彼の好きな裏庭のぶらんこに腰をおろし、自分でこぎはじめた。いつもだと私は後にまわって背中を押すのだが、この日はS夫は押すことを私に要求もせず、私も後にまわる気も起こさずに傍にゆっ

くりと腰をおろした。自分でこぎながら、S夫は私の顔をみてにこやかに笑う。私にもしたしみを向けるゆとりがあった。

朝がたから激しく降っていた雨が上がり、空の向こうのはしが明かくなっていた。私がおわきにいるだけで、S夫はいろいろのこぎ方でぶらんこに乗った。快いひとときだった。

この子が私とこの裏庭のぶらんこをこいだ最初は、一年ほど前、当時幼稚園に通っていたS夫を、父親が急に入院したために母親が一日だけ連れてきたときだった。顔にしわを寄せて、何か深刻な面持ちをしたS夫と、私はほとんど一日中ぶらんこでつき合った。私も緊迫した気分で、何とかこの子の味方になればと思つて時を過ごしたのだった。きょうのS夫は違う。同じぶらんこでのびやかな表情でこいでいる。それには、この一学期、この子どもにびったりと寄り添つて過ごしたO先生との日でもある。

この快い時間を過ごせたのは、私の側にもしたしみを向けられるゆとりがあり、子どもにも開けた心があったからだろう。

この日、私は急ぎの書類があつて、校長室で机の前にしばらく坐っていた。今年の四月に新しく入学したU夫が、実習生と校長室にきて、後で大声を出した。これは私が机に向かつていることと関係があるように思えて私は椅子の向きをかえてU夫を見た。彼はチェアをしばり出そうとして蓋がとれず大声を立てていた。ふたをとってあげようかと私が

一言いうと、U夫はすぐに私の机にチューブを持ってきた。ことばをもたないこの子どもが、私の一言に応じたことに驚いた。それはボンドのチューブで、蓋は固く付着していて私にもとれなかった。U夫はなおもそれを試しているうちに、チューブが破れてボンドがはみ出してきた。U夫はべとべとのボンドを指で絵本に塗りつけた後、流しに手を洗いにいった。彼は一学期からチューブをしぼり出すことに執着していた。それも糊やボンドが多い。しばしば激しく大声をあげていたU夫と、担任のI先生が丁寧につき合って過ごしていた。この日、私の一言にこの子どもが応じたのは、この一学期の間に、I先生との間で、気持ち整理されてきたのだろうと思う。

私がU夫の手助けになればと思っかけてかけた一言が彼の心に残っていたのだろう。午後になって、私は別の子どもに要求されて、庭の固定遊具に梯子をかけていたとき、U夫はその梯子を彼の気に入る場所にかけてくれと私を呼び、身振り以示した。二人の子どもはそれぞれ別の場所に梯子をかけてもらいたくて、思い通りにゆかないとU夫は激しく声を立て私の腕をきつく掴んだ。私はことばで説明しながら、梯子をあちらにかけたりこちらにかけたりした。U夫は自分の要求を理解されたと感じたらしく、そうなるもはや大声を出さず、じきに梯子から離れて別の遊びへと向かった。

担任のI先生は、U夫がこんなに糊のチューブをしぼり出すのは、この子がべとべとの付着に関心をもっており、人間関係でも、べったりとくっつく体験をもっと必要としていると考えていた。U夫はいくらとめても結局はやってしまうのだが、仕方がないと思っ

やらせておくのと、こちらからそうした方がいい気持ちに関心を向けて、大人とのかかわりの中でそれをやるのは大きな違いがあるとI先生は私に語った。私もこの点は重要だと思ふ。子どもは同じようにしていると見えても、そこに向けられている大人の気持ちや考えによって、その同じことが子どもにとってまるで違った意味をもつ。

この二人の子どもにとって私は脇役としての存在である。学校の中でもっと深くかかわっている大人がいる。いずれの子どもも、その大人との間で、心の混乱が整理され、いまや脇役である大人にも、したしみを向けるようになっていく。その子どもの心にこたえるだけのゆとりが、脇役である大人にもできたとき、子どもは社会的にひろがっていく。だが子どもと身を入れて深くかかわることと、そして、心が開かれた人たちがまわりにいることと、両方があるって、子どもの世界は開かれる。

夏休みの終りころ、御殿場コロニーのセミナーで、最首悟さんがご自分のダウンズ症の子どもさんのことから、人間の負う不条理について語られた。私はそのことについて考えていた。

障害の子どもを望んで生んだ親はおそらくいないだろう。子どもが生まれたときに、大きくならなかったら養護学校に入れたいと思っていた親もいないにちがいない。子どもは何も言わないが、やはり自分が望んで障害を負ったのではないだろう。私の学校にはそういう親



子が集まっている。先生たちも、そして私も、最初からこういう学校の先生になることを夢みていたのではない。ところが実際にその中に身をおいてみると、そこには人生の真実にふれるものがある。それは、この子どもたちの存在が、私どもが好むと否とにかかわらず、この世の中の不可避な現実であることに根ざしているように思われる。不条理である現実をそのままに肯定して、その中で生きはじめると、不思議なことにそこに光が射してくる。

不条理の現実はこの子たちの存在の問題に限らない。病気でも、災害でも、個人的運命でも、望まないのに負わねばならない不条理の状況は人間につきまとう。

それを負うというからには、負う主体がある。主体である私が、それをどう負うかが、不条理の中にある人間に問われているのではないだろうか。負わされている状況の中に閉じこめられているときには人の心にゆとりがない。だが、それをどう負うかは、主体の自由委ねられている。不条理を明かるく負っている親子をみると、真の自己は、それを負って生きる主体にこそ見出されるのではないかと思う。

状況に閉じこめられる自分と、それを負う主体である自分と、この両者は実際には判然と分けられるものではない。ことに肉体的、精神的に疲労の中にいるとき、「自分」はその中から脱け出すことはむずかしい。そのただ中にある親子に接するときには、そこから一歩はなれてなどとは到底いうことができない。そういうときにはどうしたらいいのだろうか。

ゆとりをもって子どもをみられるときというのは、いつも当然のこととしてあるのではない。それは、あるとき、恵みとして私共に与えられる。

(愛育養護学校)

最終回

コトワザの仕掛け

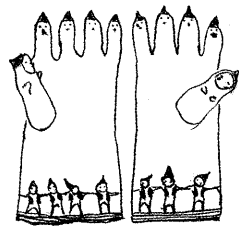
堀内 守

カスガイ

カスガイをごらんになったことがおありでしょうか。
漢字で書くと、「金ヘン」に「送」と書きます。変わった漢字。もちろん、当用漢字にはない。ワープロのフロッピイにも入力されていません。

カスガイは、戸を閉ざす金具でした。カケガネともいいました。建材の合わせ目をつなぎとめるために打ち込む両端の曲がった大釘のこと——まあ、こういったところがカスガイのセツメイです。

そこから転じて、両者（たとえそれが材であれ、人で



あれ)のあいだをつなぎとめるもの、という柔かい意味が生まれました。実物のカスガイは鉄製ですが、転じたカスガイの方は伸縮自在、観念の擬集体です。

ご存知のコトワザ「子は夫婦のカスガイ」などがその代表的なものです。

ことによると、このコトワザも最近ではおかしくなったのかもしれないが、それはともあれ、「カスガイ」の本体も見えなくなったこのごろですから無理もありません。

でも、このコトワザに少々こだわってみたい。なぜなら、このコトワザの歯切れの悪さが気になるからです。人によっては、このコトワザを「歯切れよきコトワザ」とごらんになる。そういう方がおられてもよい。でも、このコトワザは、まったく「諺」ならぬ「言葉」ことわざではないか、ことばのマジックではないかと疑ってみる価値はありそう。だいいち、体言止めで、言い切っていない。ニュアンスをぼかしている。読む方は、それに動詞をくっつけて理解しています。「子は夫婦のカスガイ」に続

けて、「である」だの、「なり」だの。それはみなココロのなかでなされる「言葉」です。ならば、もう少し積極的に、「ではない」だの、「であってほしい」だのを付け加える実験があったっておかしくはないでしょう。

なのに、たいてい「である」を付け加えて解釈している。

ことわざ 言葉の業

やっぱり「言葉の業」なのです。「言の術」といってもいい。

試みに、ココロのなかで生じる場面を映像化してみてください。まず、「カスガイ」というモノを示す。そして、カスガイのはたらきを説明する。そのあと、両親に手をひかれている子どもを映す。

説明がなくとも、この映像に接した人は、ある連想によって、「カスガイ」が「キズナ」に転じていることを見抜きます。いや、見抜けるようにあらかじめセットしてあります。

いささかCM風の風景ですが、「子は夫婦のカスガイ」は、みごとに「である」を消去しており、そのことよって、きわめてCMに近いことを暗示しています。

もし、右の映像をつなげて、ちょっとした説明を加えましょう。とたんに、あの映像は、ある情感を示しはじめます。

さて、この「カスガイ」ですが、実物をごらんにならなくとも、以上で大体の見当はおつきになったと思います。何しろ、実物はいささかドギツク、あまり格好のよいものではありません。むしろ無骨なところが愛嬌があるくらいです。

でも、実物を知らなくとも、このコトワザのイミはどんな見当をつけることができます。大体コトワザなるものは、短かく、簡潔に事態を表現し、相手に反論の余地を与えぬほど歯切れがよくなくてはいけません。そして、このコトワザのように、「である」はこっそりと隠してしまうのが特徴のようです。しかし、完全に隠してしまわない。あるていど見当がつくように仕掛けてあ

る。だから、それを読み解く面白さもあるのです。

「子は夫婦のカスガイ」

もっと省略可能です。

「子はカスガイ」

これでも充分イミが伝わりそう。

読み方を変えてみる。

「コはフーフのカスガイ」

「コはメオトのカスガイ」

「シはフーフのカスガイ」

「ネはメオトのカスガイ」

余分なことと思わないでいただきたい。つまり、このコトワザは、暗々裡に「夫婦」の方に焦点を当てているのです。「夫婦」をターゲット(的)としているといっても、「夫婦」を読者に想定しているといってもかまわない。

「子」は何も主張してはいません。

もうひとつ、「言の葉」を。

この「子」は何歳ぐらいでしょうか。二十歳、三十歳

……などということは想定されていません。どう考えても十歳以下。もっとももっと幼ない子——でなくちゃ、ママになりません。

サマになる

こうやってさまざまな面からつついていくと、このコトワザが事実を淡々と表現しているとは思えなくなってきました。

言外のイミが主で、文言上のイミは従になっている。そういう気がしてきます。

『子は夫婦のカスガイ』というじゃないか。だから……』というような、「だから……」に続くセリフ、その場面や状況が問題になってきます。

逆にいえば、今日、「子は夫婦のカスガイ」というコトワザが使われなくなったとしたら、その場面や状況が変わった、ということになるのではないのでしょうか。

このコトワザの言語上の面白味は「夫婦」という字にあります。これを「夫」と「妻」としたら「オット」と

「ツマ」になり、音声上の調和は失われます。「メオト」

は両者の融合状態を示します。今ならば、アツアツの新婚さんのイメージで、「子」の存在する余地はない。すると、「フーフ」と読ませたからには、当然、ある期間が過ぎ、「似た者夫婦」になっているか、それとも時折はイサカイなどをするくらいに慣れ、馴れ、狎れてきていると見なければなりません。このコトワザは、この時期のフーフを対象としています。

つまり、慣れ、馴れ、狎れの日常性を前提にしてはじめて、このコトワザは「そのとおり」とか、「まさか」とか、「そうかしら」とか、さまざまの波紋を呼び起すのです。

サマミロ

こういうアリサマを見ていくと、「サマ」を見ていくことの大切なことが身にしみてわかってきます。「ザマミロ」とは、今日ではののしることに転じてしまいました。それがもとに戻し、「サマミロ」と濁音ははずし

てみればよいでしょう。パリヅウゴン（罵詈雑言）のサマはさっぱりと消え失せ、アリサマを丹念に見ていこうという態度がそこに表明されているようです。そして、同時に、そこには、「一步気をゆるめると『ザマミロ』に転じてしまうかもしれない」というきわどい覚悟も表現されているようです。

さて、「子は夫婦のカスガイ」の「子」の方に移りま
す。先ほど指摘したように、このコトワザにおいては「子」のアリサマはさして重要ではないように見えます。「カスガイ」にたとえられているのがオチですから。

ところが、同じく先ほど試みたように、「子」を發生的に、主体的にとらえ直してみるならば、「子」のイメージはもっと躍動的になっていきます。

このコトワザのイミは一つだ。そしてこう解釈するのが唯一の正しい解釈だ。もし、そう主張するような人がいたら、そのサマは少なからず異様です。むしろ、いろいろに解釈でき、しかもそれぞれがそれなりの妥当性を

もっているサマを見てとることが必要です。

フーフ

もうだいぶ昔のことになりますが、友人の結婚式に出ました。招かれた客のなかで、かなりのおとしの方が祝辞をのべました。そのあいさつが奇妙なことにまだ記憶に残っています。

「えー、フーフというものは、一身体でありまして、そのことは、フーフということばにあらわれているのです。フーフと上から読んでもフーフ、下から読んでもフーフ、左から読んでもフーフ、右から読んでもフーフであります……」

めでたい場面ですから、こういう祝辞が楽しく全体の雰囲気盛りあげてくれました。

しばらくたってから、この祝辞をあらためて考え直してみると、内容はいかにも平凡のように思えました。まるでコトバアソビをしているようにも思えます。しかし、もうしばらくして考え直してみると、「上から、下

から」はわかりますが、「ヨコから」読む段になると、少しおかしく思えました。その方が調子に乗って、つい「左右」を「上下」に対比してしまったからでしょう。

「夫婦」を上から読む。そして、下から読む。それは面白い。しかし、「夫婦」と書いてあるのを左から読んだり、右から読んだりしたら、はたして「フーフ」ということになるのか？

さて、話を先へ進めましょう。

対称ということばをご存知ですね。算数や数学に出てきたあの「対称」です。英語では「シメトリ」。古代ギリシア人たちは、このことばを部分と全体とのあいだの節度、つりあい、調和、みごとな均衡というイミで使っていました。現代でも建築家がほぼこれと同じイミで使っています。ところが、物理学や現代数学では、対象の概念は空間的であることをやめ、一つの集合あるいは実験においてあらわれる一連の変化のなかに、不変の要素が続いて出てくることをさしています。

ともあれ、昔の算数の時間に学んだことを参考にして

みましょう。いくつかのタイプの対称がありました。平移動による対称がありました。回転による対称もありました。

鏡による物体と像の対称、これがいちばんわかりやすい対称の例だと思えます。私たちの顔は左右対称です。身体も。家や家具だって対称のものが多し。それは何をイミするのでしょうか。

安定と平衡です。

上から、下から

日本語は上から下へとタテに書いていくこともできます。左から右へ書いてもよい。以前は右から左へ書いた時代もありました。

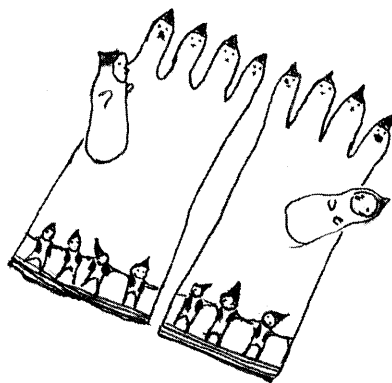
どちらが便利か。ということはいえても、どちらが正しいか、とはいえない。それくらい、書き方は社会の約束にもとづいています。

理論上は「下から上へ」と書いていってもおかしいことはありません。しかし、もしそういう文章に出あった

ら、私たちはきつとふだんのやり方にしたがって、まずは上から読んで、その文がおかしいことに気づく、というのがいちばんありそうなことのように思えます。

おそらく上から読む、という習慣は、重力が落下を強制するという単純な事実から類推されたものでしょう。

幼ない子どもが、「空へ煙が登っていく」という代わりに、「空へ煙が落ちていく」と表現することがありますが、それは単におかしいというだけではなく、私たちの慣れ切った表現の虚を衝くからにはかなりません。



そして、あらためて私たち自身の常識の虚を衝けば、そもそも「空へ煙が登っていく」という、ごくあたりまえの表現も、見かけ上、そう「見える」というだけであって、分子の運動という次元でとらえたら、「登る」とはいえないでしょう。

ともあれ、上と下という単純な分類からスタートして、人類はいくつもの対になった命題を確実に生み出してきました。そして、その結果、二元論の宇宙がちりちりときあがってしまいました。上と下は、優と劣、精

と粗、精神と物質、高潔と低俗、というような対象的な価値で分けられてしまいました。もともと、対等な対で、対称だったものが、いつのまにか対象になったのです。「上の子」「下の子」「上位の子」「下位の子」等々の分類はまだ初歩的です。

前や後や右左

同様に、前と後の対立は、それ自身の身体的な次元を越えて世界の分割の基準となつて拡がっていきました。前後という対は、未来と過去、早熟と晩熟、進歩と退歩の対立をもたらします。進んだ思想や進歩的な思想、後れた思想や後進国などと申します。

これらも、実際のところは、身体をもとにした前方と後方の根源的なイメージからひき出されたものです。左右も似た構造をもっています。

こういう分類の網のなかに「子」を入れてみましょう。すると、この分類の網はたちどころに、この「子」を上下、前後、左右から評価を下してしまいます。

運・不運

では、それですべてなのでしょううか。

そうではありません。

運と不運、善と悪、吉と凶とを、あの上下や前後左右の分類の網ではとらえられぬ問題にふり当てているのです。

運や不運などといいますと、オミクジだの、占いだの、さまざまな現象が思い出されますが、「当たるか当たらぬか」という二者択一的な興味をもってこれらを見るよりも、運や不運や吉や凶が、人間の心の動きが形成する世界で、人間が不安に動揺し、手さぐりをしていることを象徴していると見るべきでしょう。

人間がみずからの能力を発揮して行なう仕事には予見する能力と首尾よく目的を達成する能力が見てとれます。計画したり、練り直したり、修正したりしていくなかでそれらの力は発揮されていきますが、その過程にも運不運はつきものです。けれども、不運だったとして

も、このような場合にはやり直しもきき、不運を運に変換させることもできましょう。なぜなら、不運を予見し、首尾よくやりとげること人間能力のうちに含まれているのですから。

しかし、もうひとつの人間の作品たる社会制度は、固有の重力をもっています。この制度は、人間がみずからの能力を発揮して、首尾よく初期の目的を達成するのを妨げます。

運・不運ということばは、こういうおきてにふれる、このなかで顕著に姿をあらわします。

ふれる？ 触れる。さわる。当たる。感じる。かかわる。そむく。ふれ歩く。

とにかく、さまざまな拡がりをもっているのが「ふれる」ですが、あのコトワザ、「子は夫婦のカスガイ」も、運や不運やおきてにふれたことを暗示してはいないでしょうか。

もっと具体的にいきましょう。

「子は夫婦のカスガイ」というコトワザは、「子」が申

したことばとは考えられません。また「夫婦」が自己主張や自己確認のイミでそういったとはいえません。もし、自己確認や自己主張の文脈で語ったのなら、かならず感嘆文の形をとるはずで、「やっばり、子は夫婦のカスガイだなあ！」という思い入れがあるはずです。しかるに、それが無い。

してみると、「子は夫婦のカスガイ」はだれがいったのでしょうか。

上の者が下々の者に「夫婦」のオキテとして語り、そうあるよう命じた、とも考えられます。また、そのコトワザは「セケン（世間）」がそういつている、とも考えられます。この場合の「セケン」は輪郭があいまいです。けれども確実にその存在が伝わってくる。少しでもそのルールにふれると、ただちに非難が戻ってくる。

「子は夫婦のカスガイ」は、そういう「セケン」に対して「子」をかばう「夫婦」の態度表明ともとれます。

また逆に、「セケン」が「夫婦」を監視すべく設けた監視の窓のようにも見えてきます。

カスガイ再考

以上のように見えてくると、「カスガイ」という比喩は、意外に巧みな比喩であることがわかってきます。それは、社会が沈澱し、落ちついた段階の平衡状態を示しているように見えます。「子」や「夫婦」ならずとも、「AはBとCとのカスガイ」というように一般化することもできますから。「AはBとCとのバインド」「AはBとCとのボンド」といってもそう大して外れているとはいえないでしょう。

「AはBとCとのカンスキ」「AはBとCとの取りもち」「AはBとCとの仲立ち」。

時間の流れのなかでは勝を占めた安定性も、尊敬と規則の地位を維持できず、激しい感情の爆発と狂乱が生まれます。上下の転倒、左右の入れかえ、前後の取りかえが生まれたりします。こういうときには「カスガイ」は、重苦しいもの、わずらわしいもの、のように見えてくるはずで

「カスガイ」が、愛くるしいもの、無邪気なはたらきをする存在ものに見えるのは、あの爆発と狂乱が鎮静したあとです。ありふれたものが新鮮に見えるとき。「カスガイ」は単なる比喩ではなくなり、人間が過去現在未来を通じて、さまざまな手さぐりをくりかえしながら今日にいたったことが見えてくるとき。

一年の疲れが、一日の疲れが、ふっと消えるようなユ一モアを「カスガイ」を鏡として読みとったとき。

コトワザは、言葉、事業、異業等ことわざを呼び寄せ、「子」はその名を呼ばれ、「夫婦」もたがいの名を呼び合うでしょう。これが生きた実存なのです。

してみると、あの短かいセリフ、「子は夫婦のカスガイ」をどのように解し、どのように演じるか、にはかなりの余地の選択が許されているわけです、それはまた「カスガイ」がどう応答するか、という次のセリフや演技の面白さを読みとることに通じています。

(名古屋大学)

幼児と共に迎えるクリスマス

——総合的表現としての

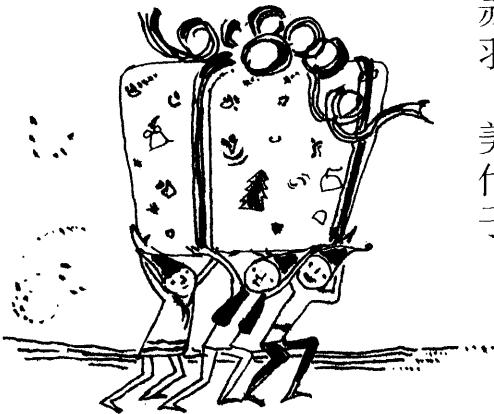
クリスマス聖劇に取り組む過程——

赤羽 美代子

質問

Q、R園の年間を通しての保育の流れをお聞かせください。

A、年間を通しての保育方法は「縦割り」混合保育です。幼児は、自由な時間帯の中で自分の意志に基づき、自主的な活動を展開します。幼児ひとりひとりが遊びの中で体験する側面・内面に視点をおき、心の成



長を促す保育とでも申しましょか。

Q、障害児を受け入れていただけますか？ 障害児保育に欠かせない、ポイントについてお聞かせください。

A、受け入れています。大切なポイントは教師の問題です。○鳥にも、草一本にも、呼吸を合わせる心を持ち、特別な幼児のニーズにきめ細かく対応する。○たえず学習を深め「今、私がいなければ。私は、必要とされている。」と情熱を傾ける。○共に手を取り合い、思考するメンバーで構成されている教師集団がいる事です。

教師が、自分の心の^こりに^こりをぶつけたり、短気な心の目を無造作に向ける時、障害児の敏感な心が「平ら」である筈がありません。R園は専門家の先生方と園の教師が、必要に応じて、共に学習し合う体制が組まれていますので、明日に向かっての保育に新しい力が湧きます。

Q、R園園児の家庭環境をお聞かせ下さい。

A、(園児数〓三十五名〓四十名)大部分がマンション住まい(三階〓十階以上)。家族数〓平均、両親・子ども二人の四人家族です。近所には園児の友だちは皆無といえましょ。玄関の重い金属製の扉がピタッと閉ざされると、母と子のみの空間が、幼児の遊びの世界となります。必然的に「子どもの友だちを求めて」との理由で、母、子は〓〓塾、〓〓教室へ通い、受験を目的とした訓練が母、子共にしっかりと身についていきます。

幼児は「自由に、自発的に遊ぶ力」の根元が、次第に細まる時期に入園を迎えます。

Q、新入園児の四月の状態と、この時期の取り組み方をお聞かせ下さい。

A、先の質問でお答えしたように、ひとりひとりの生活習慣のカラーが、色とりどりに染まっている幼児たちです。

一九八八年四月、R園三・四歳児（入園二週目）の行動をチェックした、大まかな例を上げてみますと、AⅡ自分の活動を教師に依存する。BⅡ「遊び」そのものが解らない。遊びのイメージが湧かない。CⅡ「園庭での遊び」を誘導すると『土がつくからきたない』『虫がいる』『水がはねて服がよごれる』。DⅡ「園舎内の遊び」の傾向。女兒は言葉達者に使いこなして我を張る。男・女兒共にすぐ泣く（めそめそ泣き・わめき泣き）。EⅡ園のスロープ（ゆるやかな坂）での遊びは、自動車・スクーターをこいでスピードを出し風を切つて飛ばす。幼児同志の遊びのイメージがかなり重なり、長時間、異年齢児とのグループ活動が展開する。（信号作り。一方通行を守る。交通整理のお巡りさん。ガソリンスタンド。乗り物の連結を工夫、発見する。友だちの発見を模倣し、新しい遊びの発見をする。新入園児はルール違反が多く、邪魔をするが、新入園児なりの遊びを続ける）

——幼児降園後の教師の課題——

これらの幼児の行動は、自ら選んだ意志的行動力、習慣的な反応か、他指示に寄る行動か、内面を検討する。

教師会①

——幼児にとって必要な体験を考える——

最近、幼児が身につける大切な習慣として、基本的生活習慣が強調されます。

朝、幼児の起床（家人が起こす）と同事にトイレ、歯磨き、着衣、食事等に関する母親の指示が命令形で幼児の頭上に飛びかいます。「行動がのろいので、つい口や手が出てしまいます。生活習慣が身にきちんとなつかない」と学校に入れてくれませんので」と母親は語る。（母親が選んだ服を幼児は好まず、この時だけは自分の意志活動を発揮するようです。母親にタンスの前で長時間の抵抗を試み、服を着ずに頑張る子に、母親が負けるという結果になるそうです。）自分が選んだ服を着て颯爽と登園する素敵なスタイルストたち。又、他の幼児も、思わず見入ってしまう、ナ、ウ、イ、色、彩、感、覚、の、ポ、ー、イ、も、現、わ

れ、母親が恥じ入る姿も見られる愉快で楽しい朝の登園風景です。

起床後、幼児自身の選択による、こんな、朝の体験はいかがでしょう？ ● Ⅱ 幼児の発想。◎ Ⅱ 母親

● 今朝は、足が冷えるから、長靴下を履こうか？ いや、短靴下の方が恰好が良いのでは？

◎ 幼児の選択を待つが、母の考えも話す場合もある。

● 朝、幼稚園に一番に着きたい気持ちがあるが、朝のテレビの続きも見たい。

◎ 幼児に選択と決断の機会を与え、幼児が直面する事柄に、大人は、幼児の問題にポイントを定め、「指示」する事もあれば、「待つ」場合もある。積極的な生活習慣が、自然に積み重なって、幼児の内面が育っていくのを促したい。

教師会②

——障害児と共に歩む保育について思考する——

○ 「社会性を養う」「平等への参加」を目的として、指

導してしまう保育は「強制的抑圧」が伴って障害児は、「無気力状態」「自立性衰弱」を積み重ねるだけです。障害児が、だんだんと教師の指示に従うのみの行動をするようになると、教師は、満足した保育の成果であるとして、良い評価をしようか？ 障害児の表面的な行動のレベルのみで関わる時、その本質を見失う結果となります。

○ 一見、ゆっくり、ノロノロの行動の中にも、分析すると、自分の考えによる自主的な目的をもった行動であり、その行動こそ、焦点を置くべきでしょう。

○ 「障害児を特別扱いをするのは差別」との考えで、終始、他の幼児と全く同じ扱いをしたり、特別な幼児の内面の訴えが聴かれなかったり、治療的な保育が無視された場合、理解されぬままに積み重なった人格形成の土壌は、自暴自棄の行動に走らざるを得ないでしょう。

教師会③ 十一月の教師会

——全園児が迎える「クリスマス」について思考する——

入園以来、八か月の園生活を経験した新入園児、或いは、二年三年近くの園生活を過ごした園児は、それなりに自然流が身につき、遊びのリズムとリラクソスの調和が保たれてきました。「遊び」に生かされ、育てられている、自然流免許皆伝を許された「遊び」の専門家たちです。

十二月は「期待と喜び」を抱き、待っていたクリスマスが、「良き喜びの訪問者」として幼児の宇宙にやってきました。トナカイは、鈴の音高らかにソリを引き、空を馳け巡り、同事に幼児たちの心も広い星空に飛び交います。

クリスマスの経験が、幼児の心に印象深い体験となつて今後の成長に繋がるように、全期間の「遊び」と「生活の環境」を裏付けとした幼児の「観察記録」をチェックして、整理いたします。

ひとりひとりの「遊び」の中に、基本的な原形として位置づいている型があります。

我慢する私と我を張る私。優しい私と残酷な



▲遊びの中の鳥が飛ぶ表現を幼児が星の子に取り入れました

私。強者の私と弱者の私。見ている私と見られている私。

「遊び」の中に、常に、一人の私は、私とは異なる感情の持ち主に変身するのです。怪獣の世界、おぼけの世界を自由自在に駆けまわるもう一人の私の行動を、友だちの評価によって、私を修正する場もあります。私と、もう一人の私が共存して遊ぶ。或る時は自主的に、ある場合には自発的に、又、指示を受けての行動と、行為する姿は、天才俳優といえども、演じる事は無理でしょう。

教師は心に留めねばならない場でもあります。

R園の十二月の保育は、幼児の全期間の裏付けとしての「総合的表現」を土台として、「聖劇」を展開させる事となりました。

幼児らは、サンタクロースの世界を思い、創造し、聖書の世界（イエス・キリストの降誕の次第）を演じ、（マリア、ヨセフ、天使、博士、羊飼い、宿屋、赤星に）変身をいたします。

幼児自身は、見られる私になって役になりきり、心を自由に飛ばし、演ずる経験をするでしょう。

聖劇の内容は、神様の御計画が確かな形ですすめられる、キ



▲教会学校でのお祈りの場面を幼児がとり入れました

リスト降誕の場面です。心を静かにする場面・躍動する喜びの場面・驚きの場面を、幼児はリズム、歌、ダンスで表現します。

聖劇という、「一本のレール」が敷かれた保育ですが、行動の主体性はあくまでも幼児であり、幼児が自発的に自由に発想する独自性を十分に認める事が大切なポイントです。

リズムの拍子、歌の内容の理解と表現方法は、時によって教師は主導性を交錯させつつ幼児の内面をとらえ、幼児の求める方向へと、関わります。

「内面を見つめる」という、幼児との関わり保育は、理屈を超えた暖かさの交流の中で、幼児が本来の姿を表現してくれる喜びを感じ合う事でしょう。

（具体的な「クリスマス聖劇」



（豊南坂幼稚園）

を幼児と共に創り上げていく記録は、紙面数の都合上割愛させていただきます。）

当日、母の会のお母様方が布にアップリケをした「キリスト降誕」の各場面の前で、幼児は活躍をいたしました。

年のおわりをしつとりと

清水 光子

「先生、うちのT、どうなんでしょう？上の子が学校でカレンダーをつくったのを見てまねして書いたはいんですけど、十二月の次に、三月なんてかいているんです！」「まあ、Tちゃんらしくて面白いこと！」と笑って応じて「お母さん、お叱りにはならなかつたでしょうね？」ときく。「ええ…まあ…」とあいまいな返事。どうやらそのときの情景が見えるようだった。

「Tちゃん、発想がユニークで、すばらしいんですね。時刻でも十二時、十三時、十四時なんていうことあるから、そんなこと考えたのかもね。でも、十二月の次はお正月で一月になるのを教えてあげればいいですよね」と応じた私。

今年も十二月になった。学校関係の年末は三月なのだが、二学期という学期は、一学期

とも三学期ともちがうようで、その終りの十二月はその意味で、一寸振りかえり、立ちどまってみたい月である。家庭では別な意味があるのはもとよりのこと。

秋の行事や、遊びがお天気都合などで十二月にずれ込むことがあったりして、そうでもなくても心忙しい気持ちで大人達をかり立てる。

落葉たく 煙けむの香まとう 幼子おきなこの ひとときうたう 我が膝ひざにきて

木俣 修

十月に掘ってきたおいもを落葉で焼いてたべる焼芋がやっとできた。ふと気がつくとき、木の枝をくべている私のそばへ「けむいけむい」と言いながらも、二、三人が来て、〃垣根の垣根の曲りかど〃とうたいながら、又ついと行ってしまふ。

この間からしきりに狼ごっこ（三匹の子豚や、赤ずきん、七匹の小山羊などのヴァリエーションのような遊び）をしていた四歳の子どもたちが、観客席を作ってお客（自他のクラス）にみせる。五歳児のクラスは十一月に拾って来た木の実、草の実木の葉などで、さまざまなものを、コマ、お人形、アクセサリーなどつくり溜めて来て、これは計画的に売り出しが催される。ゲームコーナーもあって、それには賞品まで用意されている。福引はもとよりのこと。終わりには〃SALE〃という貼り紙が出されたり、〃本日はおわり、またあした〃など。この遊びは賑やかに何日かつづく。活気に満ちた日々、保育者も充実感を味わう十二月。

それなのに、近頃の小学校低学年の子どもは式の計算はできるのに、実物で、例えばあめやえんぴつで加えたり、減ひいたり、掛けたり割わったりができない、という歎きをきいた。どんな幼児期の遊びを、熱中した遊びをした子らなのだろうと、私、老婆はふしぎでならない。

少し冷えこんで、朝、水霜が降りた日、温風ヒーターの前の敷物に座って絵本をずっとみていたU子が、つっと立って、ロングスカートをはいて、ままごとコーナーに行つて立って何か考えている。若い保育者が少しはなれたところからそれを黙って見ている。それらをおばあちゃんは少し胸をあつくしてみている。まるでいたちごっこで、絵になるな、など感じる。

倉橋惣三先生の育ての心に「ひきつけられて」という一節がある。「子どものいたずらに、ついひきつけられて叱ることを忘れている人。子どもの今の心もちにひきつけられる人。それだけでは教育になるまい。しかし、教育の前にまず、子どもにひきつけられてこそ、子どもへ即つくというものである。」と。

落葉樹は殆ど葉をおとして、林の中は意外にあかるく、やさしい日射しに空気がぬくもっている公園で、何かの建物の跡らしい石のくぼみを五歳児のM子とK子が覗いてひそひそやっている。近づいた私に気づいて、唇に指をあて、くぼみを見よ、と示す。そっとのぞいてみて、冬眠中の蛙をみた私、黙って二人にうなずき、お互いに瞳を輝かしあった。

冷たい雨が小やみになって、傘を畳んで歩いている小みちで、六歳位の男の子三人が、

道ぶちのマンホールのふたにかがんで何かみている。好奇心まる出で近づいた私に、その中の一人がふいに立ち上って「おばちゃん！ 何？」と少し咎めるような声音で言う。あわてて、たじろいだ私、「何みているのかと思って！」と我が好奇心をなだめてはなれた。三人も、ややあって、傘をふりながら走り去る。幼い子ども達の敏感な心の波動の振幅にあわせることのむずかしさ、しかも、少しでも教育という匂いがあったりすると子ども心のチューナーはうまく作動しなくなるのか、と思いつながら。

子のころ なにをわびしむ そろばんもて おのれのかおを こすりあげおり

坪野 哲久

子どもの内に潜む未知の領域の、大人のさかしらな理解を超えている……と大岡信氏は書いておられるが。

“お正月がくると、一つお年が多くなる。うれしいなうれしいな”とうたったのはもう半世紀前の子ども。今の子ども達は“もういくつねるとお正月”とお正月を待つ喜びはあるのだろうか。お正月よりクリスマス、そしてプレゼント。お正月はお年玉、と、物とのかかわりにばかり関心や期待がかたむいているのではないかと悲しい。

ともあれ、日に日に日足は短くなり、冬至になり、世のいとなみが増えますますますせわしくなる。保育日誌をひもといて、一学期、夏休み、二学期と辿ってみる。ひとりひとりの子ども

もの姿を。倉橋惣三先生が「育ての心」の中の「感情清算」で言われていることは胸に
よみがえらせ、また「とげ」の中で、「わたしたちの目にとげはないか。わたしたちの言
葉にとげはないか。わたしたちの気分にとげはないか。」との一節を思う年の暮である。

ナツメロでもめったにうたわれなくなった「冬の夜」の「ともし火近く、衣ぬう母は、春
の遊びの楽しさ語る。居並ぶ子どもは指を折りつつ、日数かぞえて喜びいさむ……」のあ
の「炉辺味」（育ての心）にある「こっくりした、濃やかな、わざとらしさのない、味わ
いのある雰囲気を」、今年の暮に希むのはひどい時代錯誤と笑われるだろうけれど……

暮も押しつまった或る日、兎の餌にする野菜のくずを、いつもの八百屋さんへ〇君と貰
いに行った。大忙がしのおじさん「うんと沢山持っていきな、兎に暮も正月もねえもん
な。暮だ、正月だって、いやだねえ……。（人間って……）」

「時計があったってなくったって、この一日にはかわりがないじゃないか……」とつぶや
いた小川未明の童話「時計のない村」の一節を思いあわせたことであった。大宇宙の中
小さな一つの星である地球、その中に生きる小さな小さな存在の人間、だから何も年忘れ
したって意味はないのだ、などと言うのではない。むしろ、厳然たる時の流れの中の過
去と未来のはざまにある現在のひとときを、かけがえのないひとときを、たとえいまわしい過
去であってもそれは取りかえしのつかないものとして現在につながっている（森本哲郎・
「ことはへの旅」より引用）ひとときを、子ども達、私などよりずっとずっと偉大な未来を

もつ子どもらと、大切にしたいと思う。

ベートーベンの第九があちこちで演奏される。私も毎年ききにいく。ベートーベンという天才が、自身の人生に悪戦苦闘し、それに勇ましく堪えぬぎ、遂に勝って、彼が人生について考えた究極をあらわそうとして、シルレルの歓喜の詩をことばとして借りさえもして——音楽の形式としては当時新機軸という——。花々しく歓喜の歌を唄いあげたという（兼常清佐著「音楽概論」より）第九。毎年指揮者がちがっても、きくホールがちがっても、いつも背筋を貫き走るようなあの感動はかわらない。

やがて除夜の鐘に送られて、二十一世紀へ又一つ近づくお正月を「昔の子ども」は待つのである。ほんとうの子ども達と。「自然は実業家でも雇主でもないが、私たち人間は自然の一員である」ことを感じながら。

（音羽幼稚園）



中国のむかしばなし

近藤 伊津子編

『人参の精と紅ホンのものがたり』

シャオサンツ
小山子與紅妞

むかし、むかし、中国の東北の長白山の麓に小さい女の子がとうさんと二人きりで住んでいました。

女の子は紅カクといい、元気なあいらしい子どもでした。紅のとうさんは人参採りの名人で、毎日、朝早くに家を出て、夜遅くまで帰りませんでした。

なにしろ、となりといっても何里も離れて、辺りには人っこ一人通りません。それで、紅カクは友だちが欲しいなあ、いつも思っていました。

毎日、とうさんが出かけたあと、家の窓から遠い山なみをながめ、春の訪れを楽しみにしていました。

野も山も花々が咲き、いつか、紅カクには小さい友だちが訪ねて来てくれそうな、そんな気がしたのです。

昨日きのうも紅カクは、待ちました。けれども誰一人として訪ねて来てくれませんでした。今日は、もう、がっかりしていました。

太陽がすっかり高く昇り、草花を照らしはじめたころ、突然、歌声がきこえてきました。

お日さまお日さま

ふしぎなお日さま

お日さまは

わたしの緑の服と帽子をてらすよ

お日さまは

わたしにほほえむよ

紅は、びっくりして外にとび出し、うれしくなって、

自分でも歌っていました。

お日さまお日さま

大好きなお日さま

お日さまは

わたしの赤い服と帽子をてらすよ

紅は、目の前に男の子がいるのに気がつきました。小さい男の子は、袖口と裾オソに、ひらひらのふち飾りのついた緑色の上着を着て、頭には赤い丸い玉をのせた小さな帽子を被っていました。

二人は、しばらく、じっと見つめあい、小さい男の子は、やっと口をききました。

「わたしは小山子シヤオサン。山の方に住んでいるんだ」

「わたしは紅カシよ。友だちができて、うれしいな」

紅は手をたたいてよろこびました。

それから二人は、まるで、ずっと前からの友だちのように遊びました。

石ころで陣とりしたり、葉っぱをつないで腕輪を作ったり、お昼になると、紅カシの出した、まん頭に、小山子シヤオサンは、懐から手の形をした葉っぱを出し、はさんで食べました。

紅は、小山子と一緒にのお昼がともうれしくてたまりません。

それから、木の枝を馬に仕立て、小枝をムチにして走りまわり、夕方まで楽しみました。

明日あした、天気がよかったら、又、遊びに来ることを約束して、小山子は帰っていきました。

こうして、来る日も来る日も、小山子と紅は、遊びすごしていましたが、ある朝、紅が起きてみると、外は、雪が降っていました。

紅はずっと小山子を待ちました。けれども、とうと

う、小山子は来ませんでした。

夜になり、とうさんが帰って来ても、紅は、淋しくて、ほんやりしていましたので、「どうしたの」とたずねられると、小山子が、今日は来てくれなかったこと、それでとてもがっかりしていることを話しました。

紅のとうさんは、「小山子？それはだれのことかね」とおどろいてたずねました。

そして、この山の家の近くには、そういう子どもはいないことを話し、虎や狼のばけものではないかとひどく心配しました。

「紅や、今度、小山子という子が遊びに来たら、糸に針をつけ、その子の上着につけてみてくれんかね。その糸をたぐって行けば、その子のことがわかるだろうよ」
そう言いつけられて、紅はうなずきました。

さて、翌日、よく晴れたお天気になり、小山子は、遊びに来ました。一日、存分に遊び、小山子が帰る頃、紅は、上着に針を付けました。

その翌朝は大へんな吹雪きになりましたが、紅のとうさんは人參採りの仲間をつれて、糸に沿って、山の奥へと入っていききました。

いつのまにか、一度も足を踏み入れたことのない山奥に来ていました。辺りは吹雪にもかかわらず、ふしぎなことに山肌には濃い緑の草がありました。

紅のとうさんは、とうとう、糸のおしまいのところにたどりつきました。

そこには、丈三、四尺もある人參が、手の型をした緑の葉をつけ、薬の根本には鮮やかな紅い実をびっしりと付けていました。

紅のとうさんは、この人參は「十年もの」に違いない、と思いました。

この値打ちものの人參がおどろかないように、声を出さないうで、そうっと掘りおこしました。

人參の根は、子どもの形をしていて、根の囲りには、ひげが付いており、ふち飾りのように見えました。

紅のとうさんは、大へんな高値たかねで人参を売り、赤い実だけ持ち帰りました。

その夜、紅かは父さんの持って帰った人参の赤い実を見て、大そう泣きました。

紅かは赤い実を植えました。

小山子シヤボシのことをいつまでも忘れることができませんでした。

中国では、山奥で採れた人参は効目のある薬として、大へんな高値がつけました。人参採りの人達は、山奥で「人参」と言うと、人参はおどろいて、遠くに逃げ去ってしまうと、信じており、「山ヤマ」と呼ぶのが慣わしでした。



南の島の子どもたち(5)

子ども心のこだわり、とらわれ

浅野 恵美子

二年間の障害児教育を受けて卒園し、今ではもう小学
二年生になっているフミアキのことをふりかえり、実践
記録としてまとめる作業をしてきた時、彼が一貫して主
張していたことが見えてきた。保母たちは、彼の思いを
もっと受け止めてあげればよかったのでは……との小さ
い後悔もおこったようだ。

巡回相談員としてかかわってきた私も又、彼の「こだ
わり」の持つ積極的な意味について改めて考えさせられ
た。彼は、はっきりと様々な形で「オレワイサレテン
カルベキダ。オレノイウコトヲキケ」と主張していたと
思う。そして、彼は、何と小学校に入ってもにたような
主張を続けていたのであった。

一人ぼっちで遊んでいたというファミアキ

彼は三歳で保育園に入園してきた。頭が大きくて体が細くて、保母にびったり寄り添ってニコニコしていた彼と始めて会った時、食が細いとか言葉がでない（入園当初、「オイシ」等の一語文程度）とか言われても対人関係良好、自己表現良好であって障害という印象からは遠いのであった。

彼は、自己の安全基地の確保ということでは保母と良く繋がって不安はなかったのですが、時々外から訪れる私に特別な関心を示すことはほとんどなかった。保母は彼の心がよくつかめていて、彼の真似を大変上手にやってみせる程であった。

彼の生育歴に目を通すと、母親が妊娠中、貧血ぎみであったこと、仮死出産で生まれたこと、けいれんがあったこと、乳のすいつきは強かったこと、言葉の話しはじめは一歳、体が弱く病院通いが多かったこと、白衣を着た人を恐れたこと等がしるされている。

彼が三歳になる以前は、母親も病弱で寝こむことがあ

り、本人は第一子で、友達もいなくて一人で遊んでいることが多かったらしい。それを見た保健婦が心配して、積極的な相談にのり、「ことばの教室」を紹介したのが障害児保育を受けるきっかけとなった。主訴は、「言葉が遅い、落着きがない」というものであった。

受けをねらう行動

入所した四月の頃の彼は、生活面の自立は良くできていて、排尿は、ほとんど失敗することはなく、どこの部屋のトイレでも使用し、パンツ・ズボンは自分で着脱できていた。問題は食の細さと偏食であったが、一年の間にすっかり改善されていた。

集団との関係では、「他の子どもがブランコに乗っていると自分も乗り込む」とか「保母が外にいる皆に入室を促すと他児の流れにそって一緒に入ってくる」等、保母の指示にもしたが、皆といることにも抵抗はない。むしろ、初めからまわりの受けをねらっているんなポーズを取るなど、人に対しても積極的であった。

この受けをねらう行動は、二年目になっても『チンチン、アッ!』といって他の子どもを笑わせている」等続いていた。彼は、何度も何度も同じことをしては友達を笑わせていたようだ。

この「受けをねらう行動」に彼らしきがあったし、発達の意味もあったと思う。周りの人への信頼感情、周りの人を自分の支持者にしたい思い、みんなの中の自分（自我）をはっきりさせようとする動きであったと思われる。そこには、自己と他者の分化があった。しかし、他者は、フミアキにとって自分の補助者、自己の一部としての他者であって、いわゆる「他者」ではなかった。周りは自分を支持し、支える存在でなければならなかったのである。そんな確信を彼は、しっかりと一貫して主張していたらしいのだ。

補助者（大人）の枠の中でのみ従順に生きていくのならそれでもよかったが、自我が芽生え出すとそれがだだこねになっていった。自分の思い通りに事が運ばないと彼は、怒り、物を投げたり、ひっくりかえったりを繰り返した。

返した。フミアキが家庭でも保育園でもしばしばおこしたパニックは、「みえない壁」となって彼を苦しめたが彼も周りもその壁を取り除くことができなかった。

その壁は、自分の味方だけを存在させようとした無理であった。逆にいえば彼が自分の補助自我を切望していたということだ。だから、もっと彼の真意をくみとってあげればよかったのではとの思いが保母におこったのである。しかし、いつまでも、そこにこだわらず、そこのみ留まろうとした彼に、ナルシストを越えられないもどかしさがあった。

フミアキ式着衣法

保育園での彼のエピソードの例を保育一年目の担当保母の手記から紹介しよう。

「初めのうちは、脱いだら着ようとせず保母に促されていたが、三、四か月で上着の脱ぎ着まで上手にできるようになった。ユニークな思い出がある。パジャマの上着のことだ。前ボタンなので他の友達とはスムーズに袖を

通しているのだが、彼にはそれができなかった。しかし、彼は彼なりにおもしろい方法を発見した。床に上着を着られる状態にして広げ、距離をはかりながら、上着に自分の体をたおして合わせていた。他の子は思いつかないことを考え出した彼は、時々そうやって着ていた。

そのようにしばらくは自分から喜んで着替えるようになっていたが、そのうちに、パンツ、ズボンさえも自分ではこうとせず保母にやってもらおうとする態度が出てきた。『頑張ってみようよ。』と励まして少しずつ介助したりしていたのだが、自我の芽生えと共にだんだん難しくなり「やりたくない！」とひっくりかえったり、クラスの保母が助けてくれないとわかると隣のクラス、それでも駄目なら遠く零、一歳のクラスへと遠征していった。職員間では、彼の依頼心が強すぎることを話し合い、手伝ってやらないことを打ち合わせてあったので、終いには、クラスに戻ってしぶしぶ着替えたり、床につつ伏して泣いて鼻水で顔をクシャクシャにしていたことがとても印象深い。『着替えようね。』と言うと『ウウン！』と

必ず拒否。特にボタン掛けは面倒がり、『オイデー、オイデー』と保母を呼んでいた。指先の力と器用さが足りなかったせいもあるだろう。何にしても着脱の面では、依頼心の強さに一年間、手をやいた。』

彼はストリートにどんどん成長していくのには、何か不足していたのであった。彼のこの状態は、おそらく体調とも家庭生活とも関連していたと思う。彼は体力がなく、病氣しやすかった上に、家庭生活も父親の仕事が順調でなく、経済的な問題も抱えていたようであったからである。

音楽が好きて記憶力抜群

保育二年目。フミアキ四歳。担任が新しくなった。彼は、新しい三人の担任（クラス担任二名、障害児加配保母一名）に違和感のみせなかったが、旧の担任の一歳児クラスへ行き、好きなラジカセを聞くことが多かったようだ。彼はラジカセが大好きで、それにのみ執着して他に遊びが広がらないので、三歳時代は禁止していた。

新しい担任たちは、彼を部屋に呼び戻す方策としてラジカセをかけたという。予想どおり彼は自分のクラスの部屋にもどってくれたそうだ。担当した保母は、彼の特徴について次のように書いている。

「カセットをまきもどしすると、じっと見ながら指で回る動作をしている事もよく見られ、機械へすぐ興味を示していることが伺えた。その他興味を示していた事は、車輪の様子を見たり、横倒しにして車輪を手でまわし、動きをじっと見たりして遊ぶことだった。それに夢中になったかと思つた途端、又室内でカセットを聞いたり、自分でセットしてみたり、トイレの水タンクの中に触れたりして遊び出していた。注意してもわけがわからず、水タンクをこわしてしまったことも度々であった。遊びの発展性がない為、一つの遊びがいつまでも繰り返されている状態なので、いろいろな遊びが楽しめるように、時々パターンを変えていくようにしたが、特にカセットに関してはなかなかで、曲がなるとすぐそれに向かうというパターンがぬけきれなかった。」

このように、彼の外界とのかかわりはユニークであった。気分が変化しやすい（泣いても直ぐ笑うことができた）、カセットのまきもどしには自分も指をまわしながらみる（その物になってみている）、音には自動的と思える程のれる（音の方が主人？）、執着心が強い等である。彼のメカ好きは父親の影響であった。彼は、音楽に合わせて歌ったり、踊ったりは大得意であり、動作も即座に覚えた。運動会のフォークダンスは友達をリードする程上手であったようだ。ふりつけ等は、保母自身が教えて忘れてしまつても彼がちゃんと覚えていてくれたという。しかし、コンピュータ人間のように一度覚えてしまったこととの関係が強くて、場面に応じて行動を変えることができなかったようだ。「登園—設定保育—食事—歯磨—着脱—午睡—おやつ—隆園の流れを変えることをこばみ、例えば時間がなくて歯みがきをカットしようとする、どうしてもやるんだといはいはり、床におおむけになって泣いてねばるといった……」と保母は書いている。ここにも、ファミアキのぶつかる壁があったので

ある。自分の体験の意味を捉える力が弱かったのかも知れない。人だけでなく、物も彼の期待する秩序を持っていないければならないのであった。

このような彼の行動は、自分の思いとの関係が強い自我の段階であるのだが、言葉的思考の発達以前の子どもの特性でもあったろう。関係体験は、プリントされるかのように彼の心にぎざみこまれたのである。

それでも彼は卒園近い頃には、大変ききわけが良くなっていた。相変らず音楽が鳴ると、すぐに部屋からぬけどだす彼に保母は、「フミアキはバーツ、みんなはマール」と言葉と動作でしつこく言うと、周りのお友達をみまわし考える仕種をして、部屋にとどまれるようになれたようだ。言葉も「アークノクツナイ」という三語文も話すようになっていた。

小学生になって

フミアキは、幼稚園を経て小学一年生になっていた。

保母たちがフミアキの担任を訪ねて、彼の学校での様子



▲どの子どもいっしょに (H保育所にて)

を聞いてきてくれた。彼は、普通学級にいて、担任の丁寧な観察、指導を受けていたのであった。先生が報告する彼の状況が保育園時代と大変そっくりなことには驚かざるをえなかった。母親から聞いたことでも愉快だと思ふのは、母親が小学校に上がる時、校長室へ出向き挨拶をしたので、本人は毎朝、学校へ来ると「校長センセイ、オハヨウゴザイマス。」と丁寧に挨拶するのが常であるということだ。校長は、大変喜び、ことのほかかわいがっているそうである。

担任の報告によると、

(1)、彼は、やはり、音楽が聞こえてくると教室からぬけだすが、他クラスの先生は受け入れている。三学期になつてから恥ずかしいのかあまり行かなくなった。

(2)、ある程度対話はできるが、長い文になるとはつきりしないところがある。

(3)、発表したい気持ちが強いので言わせると関係ない事を言ったりする。他の子が「ちがうよ」というとイライラして学習用具を投げつけたりの動作がみられた。担任

がパニックと手をたたいたら投げないようになったが、ぶるぶるふるえだしすごく緊張していた。物は投げなくなったが、わめきちらし授業が中断されることがある。

(4)、算数は一〇までの計算問題はほとんど出来、百点をとることもあった。指を使って計算する。

(5)、国語の時間は、仲良し学級へ行かせたら喜んで行きもどつてくる。

おおまかには以上である。この報告に触れて、私は「恥ずかしい」がわかりかけてきていること、先生にたかかれて緊張したことは、凄い進歩だと思つた。彼の心に「他者」がすみはじめているからである。ただこね、パニックはおさまるかも知れないと思つた。

母親に二年生になつていゝ彼の様子を訪ねてみた。彼は、仲良し学級に入り、これまでよりものびのびと勉強も進んでいるとのことだ。そして、何と予想どおり、彼のパニックはおさまり、落ち着いているとのことであった。四年近くかかつて「壁」が取れたのである。

個性をみる目を

フミアキのことはわからないことの方が多い。それにここではほんの少し紹介したにすぎない。親も保母も先生も精一杯の援助をしてきた。だから、大きく成長してくれたが、彼の障害もはっきりしてきた。彼は変化し続けている状況に受け応える力が弱いようだ。理由はわからないが、おそらく、幼少期の何処かで、彼の脳に堅さが生じたのではないかと今は思える。

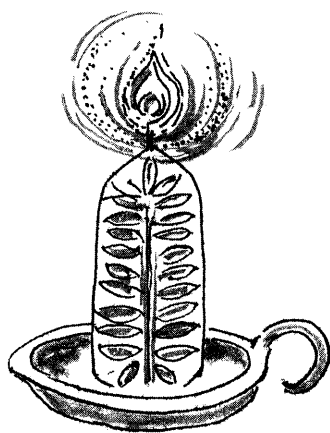
私は、自分も又、フミアキと同様に、違う内容ではあるが、世界に対して一貫した期待を抱き続け、何度も見えない壁にぶつかってきた事を思い出した。

大人も、彼と同じように、非言語のこだわりを持ち、壁にぶつかっている場合が多いと思う。それは、大人の中に生きている内なる子ども心のメッセージなのではないか。こうして、フミアキによって大人にとっての「子ども心のとらわれ」をよみとる視野がひらけてきたのである。

フミアキが一貫した主張ができたことは幸いなことで

あった。障害児を単に訓練の対象にしてはいけない。彼らの不足を補ってやりながら、彼らの個性を活かしていくことが大切である。今のフミアキならば、今の時代ならば、個性派の人物として周りに貢献できる何かが育つ余地は大いにあると思うのである。

(沖縄キリスト教短期大学)



幼児の社会性に関する一考察(1)

『出会い』について

上垣内 伸子

子どもは、自分の周囲の人・物・事柄に対して『出会い』を繰り返すことによって次第に社会的な能力を身につけていくといわれている。どのような出会い、対応し、関係を発展させていくかということは、子どもの社会性を考える上での重要なポイントになるのであろう。中でも人との出会いには、他とは異なった面白さがあ



るような気がする。それは相手の対応が複雑で予想もつかないからかもしれないし、お互いの気持ちを通じ合ったときの喜びからくるものかもしれない。そうした人が人と出会うときの面白さ、『出会い』の持つ意味について、子どものかたわらにいてみつけた小さな『出会い』の事例を手掛かりに考えてみることにする。

(一) 初めての出会い

△事例Ⅰ▽

夕方M(2歳2か月、男児)が母と散歩をしていると、駐車場のすみの方で誰かがしゃがみこんで猫に餌をやっているところに出会った。

「ニャンコだー。」

猫に気付いたMは、母の顔を見上げて嬉しそうに言うところそと近づいて行った。

そこには、Mと同じくらいの女の子と、その子のお母さんとおばあさんらしき人がいて、子猫に缶詰をやっているところだった。Mは、女の子の隣に同じようにしゃ

がみこむと、黙って子猫の食べる様を見守った。Mと母が加わっても三人は気にして顔を上げることもなく、子猫もガツガツと食べ続けている。

「よっぽどおなががすいていたんだねえ。」

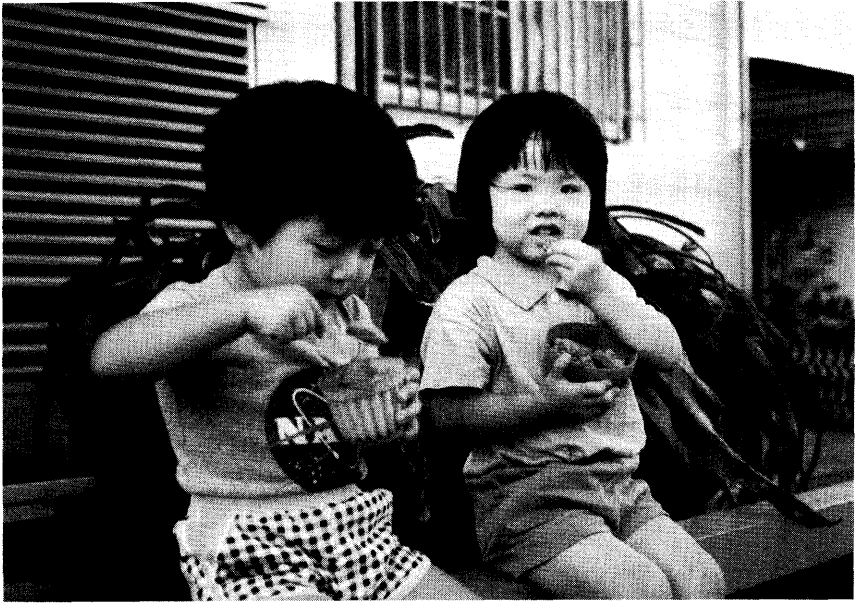
「ほれ、しっかり食べな。」

とお母さんとおばあさん。

「うわあ、ねこがごはんたべてるー。缶詰ね、たべてるんだよ。」

Mが口を開くと、女の子は初めてMの顔を見た。そしてそつと子猫の頭を撫でてもう一度Mを見た。その子の無言の誘いかけに応じるかのようにMも子猫の頭を撫で、二人で顔を見合わせてにっこりとした。

女の子は今度は子猫の背中に触った。Mもすぐと同じように背中を撫でる。そうしてくすくすと小さな声で笑いあった。女の子が触るとMがすぐにまねをして、二人顔を見合わせて笑うという繰り返してあるが、頭を撫でたり背中をつついたり、次第に大胆に触り始め、笑い声も体の揺すりも次第に大きくなっていく。子猫は迷



惑げにしゃっぽではらうがそのしゃっぽさえ二人はつかもう
としている。

「食べてるんだからじゃましないんだよ。あんたたち
だってご飯の時じゃまされたらいやでしょう。」

おばあさんにたしなめられた二人は手を引っ込めた
が、まだくすくす笑い合っている。

子猫はガツガツと食べ続け、お母さんは子猫の食べる
速さに合わせて缶詰から魚を少しずつ出してやっ
てる。

二人はいつの間にかびったりとくっついてすわって
いたが、女の子はMの肩に手をまわすとのぞきこむよう
にしてMを見てまたにっこりとした。Mも同じように手
をまわすとほほ笑み返した。そして二人はそれまでよりも
一段と背中を丸めてかがみこむと、じっと子猫が餌を食
べるのを見ていた。

乳児期以来Mの行動は、「何だろう。」という好奇心で
支えられている。この時も「猫」「人だかり」「何だ？」

という興味で近付いていったに違いない。が、Mが近付いても猫も人も誰もMの方を振り向かないばかりか物も言わない。そこでMは同じようにしやがみ込んで子猫を見守ることにする。

人と人が出会うということは、物理的に見れば、同じ空間を共有するということであろう。出合いの場が二人が共に今存在する場である。そしてその場の持つ雰囲気をも共有したとき、『出合い』が成立するのではないだろうか。そつとしやがみ込んだことで、Mは場の雰囲気も共有したように思う。

『出合い』から関係が更に発展していくためには、気持ちを通い合うこと。同じような感情を共有することが不可欠だ。ここでは、Mが口を開いたのをきっかけに女の子からの誘いかけが始まる。ことばではなく身振りとはほほ笑みだけの誘いかけだ。Mは、遠慮がちに同じことをまねて繰り返す。女の子が子猫に触れる↓Mがまねる↓二人で顔を見合わせて笑う——この三つの行動の循環の中で気持ちが次第に通いあってくる。女の子の心の小

さな弦の響きにMの弦が共鳴して大きなうねりになっていくかのようだ。

何が二人の気持ちをこれほどまでに通い合わせやすくさせたのだろうか。相手の動きを受けて動く・そばにいる・ふれあう・顔を見合わせる・笑い合う——Mと女の子がとった一連の行動は、総てが否定ではなく相手を受け入れるものであったように思う。初めての出合いを展覧させるうえで重要なのは、まず受容することであり、その最も端的な表現が同じことをまねて繰り返すことなのかもしれない。

△事例 2 V

Mは母に連れられて夕方買い物に出掛けた。

「あ、いくら。Mくんねえ、いくら好きなんだよ。おとうふもねえ、好きなの。」

「じゃあ、お豆腐買おうか。」

商店街の店先をのぞきながら母もMもゆっくりと歩いている。すると向こうから赤ちゃんとお母さんと四歳く



らしいの男の子がやってきた。いきなりその子はMの前に立ちただかると「マスクマン！」と言いなざらキックやチョップのポーズをとって向かってきた。余りに突然の見知らぬそれも自分より大きい子からの攻撃に、Mがどう対応するのかと見ていると、最初は何の事だか判らず

突っ立っていたが、『わかったぞ』とでもいう風にニコッとすると、「ボクシング！」と言いなざら握りこぶしを交互に突き出した。

今度はその男の子がびっくりする番だ。予想外の反応だったのか彼は動きを止め、ボクシングの真似をするMをいぶかしげに見ていたが、ケラケラと高い声で笑いながら2〜3メートル逃げていってMの方を振り返った。

Mはすぐに彼を追い掛ける。「まてー」と言いなざらボクシングの格好のまま走っていった。彼が逃げるとMが追う、Mが追うと彼が逃げるで、マスクマンとボクサーの追いかけっこが始まった。Mは終始ボクシングのポーズでがむしゃらに腕を前に突き出しながら走っていく。男の子は時々振り返って「〇〇キック！」などといいながら逃げていく。二人とも顔はクシャクシャ、笑い声も

上ずって興奮しているが、実に楽しそうだ。

その様子に母親同士顔を見合わせ苦笑しながら見守っている、走り疲れて二人はそれぞれの母親のところへ戻ってきた。

「バイバイ。」

買い物を続けるために反対方向へ歩き始めたが、二人は振り返って手を振り合っていた。

初めての出会いがたちまち遊びへと発展していった事例である。突然のマスクマンの攻撃が追いかけてこなくなっていたきっかけは何だったのか。

Mはマスクマンのことは知らなかったけれども、男の子の行動の意図を理解してボクシングの格好で応じた。男の子も自分の予想とは異なっていたかもしれないが、Mの意図を理解して「逃げる」「攻撃する」ことで追いかけてここに展開させていった。マスクマンとボクサー、表現型は異なっていたが、二人がそこに共通のテーマをみつければ、そのテーマを共有することで関係が発展していったのではないだろうか。

出合いの場の雰囲気・感情・テーマを共有することで、初めての出会いが発展していくように思う。

(2) 親しい関係の中で

△事例3▽

ある朝のこと。Mが登園すると、げた箱の前のテラスで先生や大きいお友達が「Mくんきたよ。」「Mくんおはよう。」と迎えてくれる。いつもの朝の始まりだがこの日はそれらがちょっと違っていった。

先生に手伝わされて靴を脱ごうとしているMのところへ、部屋の中からTが真っすぐ駆けて来る。タタタッとMの正面に来るといきなりほったをグイとつかんだ。一瞬動きを止めたMも、次の瞬間手を伸ばすとTのほったを同じようにギュウツとつまんだ。二人はほったをつかみ合い見つめあっている。声をたてることも振り払うこともなく、互いに見つめあったままだ。

と、Tがぐるりと背を向けてげた箱から自分の靴を取り出してMの前につき出した。そのまま黙ってTはMの横に座って靴を履き始める。それを見てMも脱ぎかけた靴を履き直す。先生に助けられて履き終えた二人は、並んで砂場に駆けて行った。

Mは保育園に通っており、Tは同じく2歳2か月の男児。目下のところ、お互いが一番の遊び相手である。Tは病気でしばらく休んでおり、この朝は一週間ぶりの出会であった。この事例は、『出会い』の持つ緊張感に気付かせてくれる。

Tにとって、病気で休んでいた一週間は何とはなく不安なものだったかもしれない。いつもの園庭、いつもの教室、いつもの友達——。この「いつも」に戻るために、いつもと違う出会いが必要だったのかもしれない。頬をグイッとつかむことは、これまでの二人の関係を危機にさらすことになる。Mが振り払ったり逃げたりという拒否の行動を起こす可能性のある働きかけだからだ。しかし、敢えてTはいつもと違う緊張感を伴った出会いの場面を作ることで、逆にMとの関係を確かめようとしたのではないだろうか。

果たしてTの思惑通りMは頬を同じようにつかみ返すことで応じ、二人の関係は無事（？）確かめられ、いつ

もの二人の遊びへと展開していった。この朝の出会いは、Tが一週間の空白を埋め、園でのいつもの生活を取り戻す重要なきっかけであったと思う。

(3) 出会いの後で育つもの

△事例4▽

MはいとこのY（3歳11か月、男児）と夏休みに8か月ぶりに会い、Y宅で数日を過ごした。

会うたびにそうなのだが、今回も一緒に遊ぶことがなかなか出来ない。殆ど一日を物の取り合いや叩き合い、押し合いに費やしているかのようだ。自分が遊んでいるものを取られることは、あたかも自分の領域が犯されることのように激しく泣く。自我の形成という発達段階にあるのだからとは判っていても、ほとほと困ってしまった。

そんな二人だが、Yの方は、Mが帰ってしまった日の夕方保育園から戻ると家中を捜しまわり、Mがいなくなったと知ると大泣きしてしまった。Mは、自分の家に戻

ってから、「Yさんと花火したんだよ。」「ええっとね、Yさんとね、せみつかまえたの。」と、しばらくYのことを話し続けていた。

一か月位たってYから電話があり、「Mくんげんき?」「うん、げんき。」と一言ずつ話すと、後はニヤニヤしながら受話器を握っていた。

対決・ケンカ・仲たがいと称されるような場面も『出会い』の一つには違いない。相手を拒否するということは、拒否という表現を用いて関係が成立しているということであろう。そのように相手の存在が心に残っているからこそ、後から楽しかったことを思い出すことも起こってくる。その場の現象だけに目を向けると、物の取り合いとか叩き合いといったマイナス面ばかりが目立ってしまうような関係の中にも、お互いを大切な存在と認識する心が育っているように思う。

(お茶の水女子大学)



訂正 十一月号3頁、48頁の

『年長年少』は『年長少年』と

訂正し、お詫び申し上げます。

編集部

幼児の教育第八十八巻(昭和六十三年)総目録

十一号

世界史の中の現代の幼稚園の課題 ヨー

ロッパ会議報告書に見る 津守 真

SF的読み解き 子どもという風景 第

三十三回「現代」のふくみ 堀内 守

ふくろうのつぶやき―育つには、時とリ

ズムが― 真壁 伍郎

「緑のオームと三つの宝もの」―中国の

むかし話― 近藤伊津子・編

子どもの会話(その五) 無藤 隆

もう一つのカナダ―いま、極北の子ども

たちの周辺で― 鍋合智恵子

一歳六月健診経過観察における遊びグ

ループ指導の展開 その2

上垣内伸子・古屋喜美代

市川奈緒子・山崎 聡子

若いお母さんたちへ

はるにれの会 橋本 都

十二号

冬の声 太田 愛人

SF的読み解き 子どもという風景

第三十四回 変化の潮流 堀内 守

ある日―行為の意味の理解はいかにして

可能かを考える― 津守 真

幼児期の意味するもの 本田 和子

落とし穴 はるにれの会 山本 奈緒

冬から春へ―無患子― 蕪木 寿江

子どもの会話(その六) 無藤 隆

中国のむかし話「宝の盆」近藤伊津子編

住まい「表と裏」 小澤 啓子

十三号

自分らしく生きる自由―ある日の保育の

中で考える― 津守 真

SF的読み解き 子どもという風景 第

三十五回 メディアの幻想 堀内 守

子どもに発明・発見をさせる幼稚園

アメリカ、イリノイ大学附属幼稚園で

の実践(1) 田村 恵

ささやかでしたたかな力―からくり人形

と子ども― 森下みさ子

△座談会▽子どもたちの出発によせて

猪平 真理・稲垣真理子・洞庭 千尋

河合 聡子・向山 陽子

若いお母さんたちへ 「育てる」ってむ

ずかしい はるにれの会 入江 礼子

三歳すみれ物語(その2)

「つながる・つなげる」 村松三恵子

パソコン通信と年齢差 土屋真美子

十四号

△巻頭言▽これからの幼稚園教育

河野 重男

受動を能動にかえる自我の力 津守 真

SF的読み解き 子どもという風景

第三十六回桃太郎の背中より 堀内守

子どもと(1)四月・ゆっくりと 清水光子

新しい年度がはじまるにあたって

村石 京

新入園児と学校 濱口 紀恵

南の島の子どもたち(1)オープンな縦わり

的保育がもたらしたもの 浅野恵美子

臨床の現場から子育てを考える その1

働く母親にとって子どもとは 鮎田 典子

若いお母さんたちへ 娘と共に暮らす中

で はるにれの会 向山 陽子

十五号

△巻頭言▽いま・未来をみつめての幼児

教育

岡田 正章

保育の専門性・保育の協力性 津守 真

SF的読み解き 子どもという風景

第三十七回 おへその見立て 堀内守

子どもと(2)五月・よりそって 清水光子

「子どもと共に」先生 二年生の記

平岡 美生

△特集▽子どもの日

金太郎 宮田 登

鯉のぼりの里を訪ねて 編集部

臨床の現場から子育てを考える その2

いじめ・いじめられ 鮎田 典子

若いお母さんたちへ 長女と私の中学時

代 はるにれの会 塚田 幸子

十六号

△巻頭言▽新しい幼児教育をめざして

黒田 成子

めがね 津守 真

SF的読み解き 子どもという風景

第三十八回 やさしい狡智 堀内 守

子どもと(3) 六月・ゆたかに 清水光子

森の組から 昭和63年2月22日(月)の保育

村山英子 編集部

△特集▽傘・雨・子ども

絵画にみる傘・十七世紀オランダの場合

堤 委子

開きかけた傘・浮世絵の少女の

森下みさ子

雨の日の保育

長山 篤子

泥爆弾と水爆弾

近藤千恵子

南の島の子どもたち(2) 想像性が豊かな

ホノカちゃんのこと 浅野恵美子

若いお母さんたちへ 大きくなるという

こと はるにれの会 宮里 暁美

十七号

△巻頭言▽教育の原型としての幼児教育

秋山 和夫

かぎ SF的読み解き 子どもという風景

第三十九回 玩具の舞台 堀内 守

子どもと(4)七月・自然の中で 清水光子

心象風景——星—— 渡部 潤一

臨床の現場から子育てを考える その3

自分の意志を持つとうとしない若者たち

子どもに発明・発見をさせる幼稚園

アメリカ、イリノイ大学附属幼稚園で

の実践(2) 田村 恵

若いお母さんたちへ 小学生の娘たちと

共に はるにれの会 友定 啓子

十八号

△特集▽緑蔭図書紹介

大塚 雅彦・小池 正胤・近藤伊津子

皆川美恵子・川崎絵都夫・枝広美穂子

クラス 津守 真

SF的読み解き 子どもという風景

第四十回 気の広がり 堀内 守

子どもと(5) 八月・たより 清水 光子

南の島の子どもたち(3) 父と母と子の間

若いお母さんたちへ 「クラス」の先生

になって はるにれの会 川上 美子

十九号

△巻頭言▽「ヒトとモノ」から「ヒト」と「ヒト」へ

阿部 志郎

関心 津守 真

図書紹介 中村 弓子・国越 健司

SF的読み解き 子どもという風景 第

四十一回さまざまな呼び声 堀内 守

子どもと(6) 九月・外へ 清水 光子

共に育つ 稲岡 康好

臨床の現場から子育てを考える その4

感情のコントロールを知らない子ども

たち 鮎田 典子

若いお母さんたちへ 子育ての輪

榎田二三子

十号

△巻頭言▽生きる力の培養期 川崎千東

平和のための教育 津守 真

自由保育の原点を求めて 小川 剛

S F的読み解き 子どもという風景

第四十二回 乗ること 堀内 守

子どもと(7) 十月・青空を仰いで

清水 光子

昆虫の世界 夏から秋へ① 小島 賢司

子どもの領分 国吉 栄

南の島の子どもたち(4) 子どもが変わる

に「とき」あり 浅野恵美子

若いお母さんたちへ 辞めて考える子ども

ものこと はるにれの会 河合 聡子

十一号

△巻頭言▽「幼児をのほからいを」

河邊 杲

目標 津守 真

S F的読み解き 子どもという風景

第四十三回 子どもの領分 堀内 守

子どもと(8) 十一月・ひなた 清水光子

子どもに発明・発見をさせる幼稚園

アメリカ、イリノイ大学附属幼稚園で

の実践(3)

結城(田村)恵

イギリスだより 立教英国学院の子ども

たち

昆虫の世界 夏から秋へ② 小島 賢司

臨床の現場から子育てを考える その5

年長少年のうそ 鮎田 典子

若いお母さんたちへ 新東京子育て事情

私の場合 はるにれの会 鈴木貴志子

十二月

優しさこそ 森田 宗一

したしみを向けるゆとり 津守 真

S F的読み解き 子どもという風景

最終回 コトワザの仕掛け 堀内 守

幼児と共に迎えるクリスマス

子どもと(9) 年のおわりをしつとりと

赤羽美代子

清水 光子

中国のむかしばなし 近藤伊津子・編

南の島の子どもたち(5) 子ども心のこた

わり、とらわれ 浅野恵美子

幼児の社会性に関する一考察(1)

『出会い』について 上垣内伸子

第八十七巻総目録

幼児の教育 第八十七巻 第十二号

十二月号 ©

定価 四〇〇円

昭和六十三年十一月二十五日 印刷

昭和六十三年十二月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子

発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

TEL・二九二七七八一(代)

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

新教育要領の基本を知りたい人に、子どもをもつと知りたい人に、保育をリフレッシュしたい人々に贈る。

森上史朗対談集

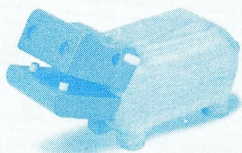
人間・子ども・保育

中川李枝子・古田足日・角野栄子・佐伯 胖・竹内敏晴・早乙女勝元・昌子武司・稲垣忠彦・大場幸夫・鈴木とく・吉村真理子

人間・子ども・保育

森上史朗対談集

中川李枝子
古田足日
角野栄子
佐伯 胖
竹内敏晴
早乙女勝元
昌子武司
稲垣忠彦
大場幸夫
鈴木とく
吉村真理子



童話作家や演出家、教育学者が語る新鮮な子どもへの視点、話題は保育から自分史、そして人生論へと進み、保育とはこんなに奥深いものかと思わずうなずき、保育への思いを新たにしてくれる対談集です。

A5判・276ページ

定価1,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

遊びを育てる指導計画作成資料集

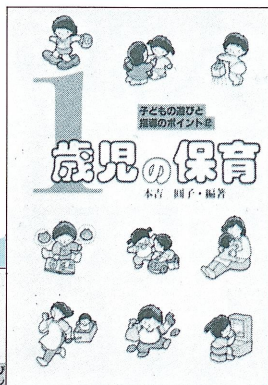
子どもの遊びと指導のポイント②

子どもの遊びと指導のポイント③

1歳児の保育 2歳児の保育

実践に役立つ三大特色

1. 月別子どもの姿の実例に指導のポイントが付記されていて発達段階がわかり、保育のめやすがつけやすい。
2. 子どもの生活を中心にした年間指導計画案は、保育計画の見直しに役立つ。
3. 子どもが喜ぶ遊びの実例が豊富で活動を発展させるのに役立つ。



本吉圓子
編著

保育が変わると子どもが変わる!! 本吉圓子“生き生き保育”の真髓

あせらないで待つ保育、つまずかせて学ばせる体験保育、子どもと保育者との一対一の保育、遊びの大切さを保育の信条とした本吉圓子保育の長年の実践を年齢別三分冊にまとめた保育関係者の必読書!

B5判・1歳児の保育(228頁)・2歳児の保育(232頁)・各定価2,000円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館